

都の眼

竹久夢二

青空文庫

留吉とめきちは稲田の畦あぜに腰かけて遠い山を見ていました。いつも留吉の考えることでありましたが、あの山の向うに、留吉が長いこと行つて見たいと思つている都があるのです。

そこには天子様のお城があつて、町はいつもお祭りのように賑にぎやかで、町の人達は綺麗きれいな服をきたり、うまいものを食べて、みんな結構くらしな暮くらしをしているのだ。欲しいものは何でも得られるし、見たいものはどんな面白いものでも、いつでも見ることが出来るし、どこへゆくにも電車や自動車があつて、ちよつと手を挙げると思うところへゆけるのだ。

おなじ人間に生れながら、こんな田舎いなかで、朝から晩まで山ばかり

り見て暮すのはつまらない。いくら働いても働いても、親の代から子の代まで、いやおそらくいつまでたつても、もつと生活がよくなることはないだろう。牛や馬の生活と異ちがつたことはない。たとえ馬であつても都で暮して見たいものだ。広い都のことだから、馬よりはすこしはましな生活が出来るだろう。留吉とめきちはそう考えたと、もうじつとしていられないような気がするのです。

それから三日目の朝、留吉は都の停車場へ降りていました。絵葉書や雑誌の写真で見て想像はしていたが、さて、ほんとうに都へ来てみると、どうしてこんなに沢山な人間が、集っているのだらう、そしてなんのためにこの大勢の人間は忙せわしそうにあつちこつちと歩いているのだらう。ちよつと立っている間にさえ、自動

車が二十台も留吉の前を走って行きました。

唐草模様のついた鞆かばん一つさげた留吉は、右手に洋傘こうもりを持って、停車場を出て、歩きだしました。

「おいおい危あぶない！」腕に青い布きれをつけた巡査がそう言つて、留吉を電車線路から押しだして、路みちよりもすこし小高くなつた敷石の上へ連れていつて、「電車に乗るなら、ここで待つていて下さい」と言いました。

そこには立札があつて「帯地全く安し」と書いてあるのです。

留吉は「呉服屋の広告だな」と思いましたが、帯地の安いことは留吉には用のないことでした。それよりも、今夜留吉はどこへ寝たら好いいだろうと考えました。

留吉は、小学校時代の友達で、村長の次男がいま都に住んで好い位置を得てくらしていることを思おもいだだしました。

卒業試験の時、算術の問題を彼に教えてやったことがあるから、訪ねてゆけば、彼もあの時の友情を思出すに違いない。留吉は、昔馴染なじみの友達の住所をやつと思出しました。

そこは山の手の高台で、門のある家がずらりと並んでいるのでした。

二十四番地、都は掛値をする所だから、なんでも半分に値切つて、十二番地、だなんて、村で物もの識しりの老人がいつか話してくれたのを思い出したが、まさかそれは話だと、留吉は考えました。

さて、二十四番地はどこだろう。

細つこい白い木柵もくさくに、紅い薔薇あかばらをからませた門がありました。石を畳みあげてそのうえにガラスを植えつけた塀へいがありました。またある所には、まるで西洋菓子のようにべたべたいろいろな色のついた、ちよつと食べて見たいような西洋風な家もありました。紅い丸屋根をもった、窓掛の桃色の、お伽とぎばなし 噺ばなしの子供の家のよ
うな家もありました。

二十四番地！ さあここだぞ。今田いまだ時雄ときお、ああこれだ、これが昔の友達、時公ときこうの家だ。白い石の柱が左右に立って、鉄かざりの飾かざり格子ごうしの扉ドアのような門がそれでした。まるで郡役所のような門だなど、留吉とめきちは考えました。

門からずつと玄関まで石を敷きつめて、両側に造つくりばな花はなのよう

な舶来花を咲かせてありました。

「時ときこう公もエラクなつたもんだな、算術なんかあんな下手へたくそ糞でも、都へ出るとエラクなれるものだな」留吉は、昔の友達の門をはいって、玄関の方へずんずん歩いてゆきました。

すると、なんだか変てこな心持が、留吉の心をいやに重くしはじめました。変だぞ、留吉は生れてはじめて、こんな厄介な気持を経験したので、自分にははつきり解わからないが、留吉はすこし気まりがわるくなつたのです。それはたいへん留吉を不愉快にしました。

「時公におれは竹馬を作つてやったこともあるんだ。あいつはその事もまだ覚えているだろう」

この考は、^{かんがえ}留吉をたいへん気安くして、元気よく玄関の前まで、留吉を歩かせました。「御用の方はこの釦^{ボタン}を押されたし」と柱の釦のわきに書いてある。留吉は読みました。

「おれは用があるのだ。それにここの主人はおれの友達だからな」留吉は釦を押した。チリチリチリとどこか家の奥の方で音がしました。そういう仕かけかなと思つて、留吉は、入口のガラス戸のところを見ていると、そこに一寸角ほどの穴があいています。そこで大きな一つ眼^めがぎらつと光つたかと思うと、頭の上でチリチリチリと、舶来の半鐘のような音がしました。留吉はもうとてもびつくりして、何を考える暇もなく、どんどん門の方へ駈^かけだしました。

するとその拍子に、留吉の帽子が留吉の頭から飛去つて、ころと転ころがつてゆきました。こいつは大変だと思つていると、悪い時には悪いことがあるもので、造花の西洋花の中から、齒をむいたチンのような顔をした、しかしずっと愛あいきよう嬌きようのない大犬が出てきて留吉を追いかけました。

留吉は、十一番地のところまでまるで夢中で駈かけ出だしました。やれやれとそこで立どまると、あとから今田家いまだと襟を染めぬいた法被をきた男が、留吉の帽子を持って立つていました。「どうも、これはお世話をかけました」と言つて留吉がその帽子を受取ろうとしますと、その手をぐつとその男は掴つかんで「ちよつと来い」と言つてペンキ塗ぬりの白い家へ連れてゆきました。椅子いすに腰かけた人

間の眼が十三ほど、一度にぎろつと留吉の方を見ました。それは
巡査でした。

「先程電話でお話のあつたのはそいつですね」一人の巡査が立つ
てきて、法被の男に言いました。

「こいつですよ、旦那」法被の男が言いました。

「私はその、なんにも悪いことをしたのではないですよ。その、
私は、その、昔の友達を訪ねていったですよ。ただその、眼が、
眼がそのヂリヂリヂリつと言ったでがすよ」留吉は巡査に言い
ました。巡査は髭を引張つて言いました。

「お前は今田氏の昔の友達だと言うのだね。それに違くないか、
何という名だ」。

巡査は今田氏へ電話をかけました。

「ははあなるほど、昔の友達だなどと当人は申して居りますが：
：ははあ、いやわかりました。では、とりあえずですな、外ほかに窃
盗などの目的はなかったものと推定して、放免することにいたし
ましよう。……はい……はい、どうもお手数をかけました。」チ
リンチリン

電話をかけ終った巡査は、また留吉の方へ出て、さて言うには、

「今田氏はお前のような友達を持ったことはないと仰おっしゃるよ」

「今田時雄ときおは、その、算術の試験の時……」

「もう好よい。兎とに角かくこの帽子はお前に返してやるが、今後は、他
人の邸宅へ無断で侵入しては相ならぬぞ、よしか」

留吉は、とある公園のベンチに腰かけて、つくづく帽子を眺めました。

この帽子が悪いのだ。とにかくこの帽子は、おれを今よりもっと不幸にするかも知れない。田の草をとる時にも、峠を越す時にも、この帽子はおれの連つれだったが、今は別れる時だ。留吉は、帽子を捨すててしまおうと決心しました。そこで、腰かけていたベンチの下へ、その帽子をそつとかくして、そこを立ちさりました。公園の門を二三間歩くと、

「おいおい」と言つて巡査が追いかけてきました。

「これは、君のだろう」と言つて、帽子を留吉に渡しました。

「いや、その、これはその……」留吉が、何か言おうとするうち

に、もう巡査は、ほかの帽子か何かを探しにいつてしまいました。留吉は、不幸な帽子を手に持って歩いていくうちに、たいへん腹がへつてきました。

「民衆食堂一食金十銭」と書いてある西洋館がありました。留吉は、そこへ這入はいつていつて、隅つこのあいた椅子いすに腰かけて、帽子を卓テーブル子の上へおきました。

十銭の食事が終ると、留吉は帽子を椅子の下へかくして、何食わぬ顔をして、出てきました。「君の帽子だろう」あとから食堂を出てきた車屋さんが、すつぽりと留吉とめきちの頭へ、帽子をはめてしまいました。

留吉は、長い間こがれていた都を見物することも、何か仕事を

見つけることも、また昔のお友達を思おも出すいだことも忘れてしまつたように見えました。ただもう、どうして、この不幸な帽子と別れたものかと、その事ばかり考えて、知らない街を通とおりから通へと歩きつづけるのでした。

日が暮れて街の人ひと通とおりすくなが少くなつた時分に、留吉は街はずれの汚い一軒の安宿を探しあてました。

「今度はうまくいったぞ」留吉は、宿の二階の窓から、裏の空き地へ帽子を投出しました。それで安心して、その夜はぐっすり眠つてしまいました。人の知らないうちに出立しようとおもて、眼めをさますと、帽子は枕まくら元もとにちゃんとおいてあります。

留吉は、また不幸な帽子を持って、宿を立ちました。留吉は、

とある大川の堤どての上を歩いていました。

「ここだ帽子を捨てるのは。川へ流してしまえば、もう返つて来ないだろう」

留吉は、橋の上から力一ぱい帽子を川の中へ投げやりました。

帽子は、小さな波に乗って、ぶつくりぶつくり、川下の方へ流れてゆきました。

「あばよ、おととい来いだ！」

留吉は、泣きたいような好よい気持ちで、だんだん遠くなつてゆく帽子に別れをつけました。すると一艘そうのモーターボートが、ポクン、ポクン、ポクンと言いながら、帽子の方へ走はしり出しました。ボートの中には、白い服をきた男が二人と巡査が一人乗つていま

した。まもなく帽子に追いついて、一人が帽子を救いあげると、急いでボートを岸へつなぎました。留吉があっけらかんとして見物しているうちに、帽子はいつの間にかまた留吉の頭の上へのかかっていました。

留吉は、なぜか嬉しくなつて、不幸な帽子を頭へのつけたままで泣出しました。しかし、どう考えても、今田時雄いまだときおの玄関の一寸角のガラスの穴からのぞいた眼が、公園のベンチのうしろの木の蔭かげからも、公衆食堂の椅子いすの下からも、宿屋の裏の空地にも、大川の橋の下にも、いつもぎらぎらと光つて、留吉のすることを見ているように思えるのでした。これは留吉には、たまらないことでした。

留吉が、不幸な帽子をかぶって、都の停車場からまた田舎いなかの方へ帰ったのは、それからまもないことでした。

(一九二三、七、二四)

青空文庫情報

底本：「童話集 春」小学館文庫、小学館

2004（平成16）年8月1日初版第1刷発行

底本の親本：「童話 春」研究社

1926（大正15）年

入力：田中敬三

校正：noriko saito

2005年9月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

都の眼

竹久夢二

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>